

2026年10月16日発行

事務所 武石地域総合センター内

TEL:0268-85-2511

<https://www.s-takeshi.jp>

印刷 中澤印刷株式会社



牛伏山の山頂にて



トレッキング



ネイチャーゲーム

五感を使って自然を体験 ～トレッキング・ネイチャーゲーム・スイカわり～

「今日は武石の自然に触れて、楽しい一日を過ごしたい。皆さんよろしくお願いします」はじめの会で小学6年生の坂口いづき君からあいさつがありました。夏休みに入った7月28日(火)、住みよい武石をつくる会子育て教育文化部会(小林慎一部会長)の主催による学童保育所ピーターパンの児童を対象にした自然体験イベントが美ヶ原高原と築地原トレーニングセンターを会場に行いました。

参加児童22名と学童保育所職員、つくる会部会員などが2台のバスに分乗して、最初のトレッキングを行なう美ヶ原高原道の駅に向いました。

道の駅からは、小雨と強風により霧が流れる遊歩道を牛伏山目指して登り、足下に咲く小さなピンクのハクサンフウロやマツムシソウなどの高山植物に励まされ15分ほどでケルンが並ぶ広い山頂に到着しました。残念ながらアルプスなど360度の大展望は得られませんでした。が、「武石地域で最も高い場所にある牛伏山に子どもたちを自分の足で登ら

せてあげたい。五感を使って自然を体験させたい」との小林部会長の強い思いが雨を退け、参加者全員を元気に山頂に導きました。記念の集合写真を撮ると、下山にかかりました。遊歩道から駐車場に向う途中で急に土砂降りの雨となり、急いでバスに逃げ込みました。

この後予定していたネイチャーゲームとスイカ割りには、雨のため築地原トレーニングセンターに会場を移して行ないました。

ネイチャーゲームは、うえだシェアリングネイチャーの会から江口達夫さん、玉崎修平さんのお二人が講師となり、遊び方を指導してくれました。昼食を挟んで午後は、スイカ割りを行ないました。割れた大きなスイカは大人たちが食べやすく切り分け、皆が車座になってスイカを頬張りました。スイカのようなお腹になった子どもたちの楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

第10回記念大会 武石仮装大賞



出場者と審査員、制作スタッフ、長野大学ボランティアチームの皆さん

優勝

オオカミに飲み込まれた
子豚たちを救え!!



「豚・命・救・助」元気たけしっ子

準優勝

蚕の一生を表現



「蚕都みりよく発見！蚕都の美しい
羽ばたき編」はたおり 3人娘

3位

大御所「武石さん」の
初舞台



「武石歌謡ショー」
佐々木秀美とゆかいな仲間たち

武石郵便
局長賞

にわとり衣装が
満点!



「にわたりの踊り」
ニコニコ家族

第10回
記念賞

エビが見えた!



「海の透き通った生き物」
三井 勝彦さん

パッパッパッ!



「線香花火」
佐藤 謙さん

ひとりカラオケ?



「カラオケのデュエット」
東京のじいさん&ばあさん

夫婦のなぞかけと
ダジャレが笑いを誘う



「似てるけど・・・」
還暦夫婦



優勝した「元気たけしっ子」チームの皆さん

9月20日(日)、第10回仮装大賞が武石地域総合センターコミュニティホールで開催されました。

平成30年4月、農協倉庫の軒下舞台で始まった仮装大賞は今回で10回目の節目を迎え、地元の子もたちや地元チームに加えて、武石仮装大賞の過去優勝者の再出場、県内外からテレビ番組の仮装大賞に何度も出演したレジェンドの方々の出場など、全13組が出場し、これまでの仮装大賞を集大成するような記念大会となりました。

昨年、テレビ密着取材番組で仮称大賞が紹介されて注目が集まったことや新聞報道などもあり、今回はかつてない程の来場者がありました。会場に用意した椅子があっという間に埋まり、立ち見の人が多く出たため、急遽椅子を追加するのに開演時間を10分遅らせて対応、市内外から400人以上の皆さんが詰めかけました。

各チームは、凝った手作りの小道具や舞台装置、衣装を使い、一生懸命に仮装や演技を披露、会場からは大き



審査員の皆さんも仮装して出演



資料が並ぶ展示コーナー

な笑いと拍手が起きました。

各作品の審査では、13組中で9組が20点満点の評価を受け、会場は熱気に包まれました。

今回も武石の子もたちチームの演技が優勝作品に選出され、大きな声と体で優勝を喜びました。

開演にあたり、サプライズで放送作家・舞台演出家の喰始(たべはじめ)さんからのビデオメッセージが流れ、「これから20年、30年も続けてほしい」とエールが送られました。

また、ホール入口には第1回から第9回までの仮装大賞の台本や作品プログラム、表彰トロフィー、写真集、などが展示され、来場者の皆さんが興味深く見入っていました。



「バリバリのサラリーマン」
大塚 博さん



「瞬間芸」寺尾 雄二郎さん



「大変 身」you便 s



「宝物探し」武石地域自治センター



「竜が沢の登竜門」
宮下 和美さん

第45回武石夏祭り出店

8月12日(水)、第45回武石夏祭りが武石地域総合センター駐車場・にぎわい広場にて開催されました。つくる会産業経済部会はふれあい交流部会の協力を得て今年も夏祭りに出店、下本入の畑でつくったジャガイモとトウモロコシを使って、じゃがバターと焼トウモロコシの販売を行いました。今年はじゃがバターに向けた大粒のジャガイモがたくさん採れ、トウモロコシは粒の揃った甘い物が収穫できました。いずれも評判がよく、たくさんのお客さんが店を訪れて、夏祭りの中ごろには売切れとなりました。



五感を研ぎ澄まして見えてくるもの ～森林浴体験会 in 巢栗溪谷～

9月6日(日)、つくる会ふれあい交流部会は、昨年に続き森林浴体験会を巢栗溪谷周辺を会場に開催しました。体験会には、市内外から10名が参加し、「Coもれび」から森林浴トレーナーの上野美知子さん伊井美穂さんのお二人を講師に迎え、ふれあい交流部会員がサポーターを務めました。

この日は雨上がりの曇り空、少し肌寒さを感じながらの体験会となりました。準備体操が終わると、いよいよ本番の始まりです。

眼下を流れる溪流を観ながら、両耳に手を添えて兔のように耳をそばだてて音を集めて聴き入る。野草の花びらで皮膚をなでてその感触を楽しむ。針葉樹や広葉樹の葉を手で揉みながらその香りを鼻から取り込む。池に流れ込む水流がつくる波紋、水面に映る立木の黒く揺らめく影。砂利道と草道を歩いて足裏に伝わる感触の違い。ライト付きルーペでのぞいてみる光り輝くマクロの世界。



界。溪流に足を浸し、肌から伝わってくる水の感触。林間草地に寝転がっての瞑想。

五感を研ぎ澄まさないと見えてこない自然のささやき。参加者からは、「風や香りを感じることができた」「ルーペでのぞいた世界、こんなにも豊かで多様なんだ」「自然との一体感を感じた」などの感想が寄せられました。

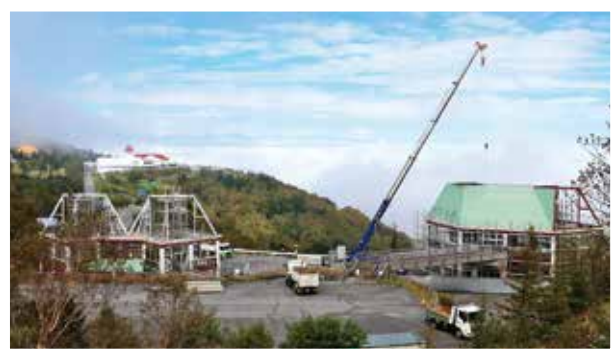
美ヶ原高原観光バスの令和8年運行終了

上田駅から美ヶ原高原への直通バスが、7月25日(土)～9月23日(水・祝)の土日祝日に運行されました。今年最終の運行となった9月23日の美ヶ原へ向かう便は満席で、立ち乗りの客が出るほどの盛況でした。終点の道の駅美ヶ原高原の駐車場は観光客の車やバイクなどでほぼ満杯となり、道の駅の展望テラスや売店は多くの観光客で混雑していました。



道の駅美ヶ原高原バス停

道の駅美ヶ原高原から県道をはさんで向かい側にある旧ガソリンスタンド・事務所、売店・レストタン、等の老朽施設は令和8年度中に取り壊して更地にする予定で、解体工事が進んでいます。施設跡地の有効活用により新たな観光地となることが期待されています。



作業が進む解体工事(令和8年9月23日)

令和8年度の実績:1,312人(運行期間:7/25～9/23 22日間)
※参考:令和7年度実績:1,117人(運行期間:7/26～9/15 18日間)

農間の感懐と人々の交流

郷土史家 見玉卓文

『武石村誌』現代編「文化」の節には、「江戸時代後期、小林一茶のような俳人が出て活躍した影響があつてか、地方一帯に俳句を研究する人たちが多く出ました」として、「子檀嶺神社、太宮諏訪神社、十二宮熊野神社などに句集の記録があり」とし、「武石俳壇の人たち」として、江戸末から昭和の12名の句を記しています(564～566ページ)。

俳諧は素人でも比較的入りやすく、集団で行うので社交性もあり、一茶の生きた文化・文政期(1804～29)以後大衆化しました。芭蕉や蕪村の時代(江戸前期～中期)の俳諧は、庶民と言っても上層の人々の高等な趣味であり、中・下層の人々の多くは文字を読むこともできませんでした。一茶は一茶の時代を、「虫鳴くや わしらも口を持ったとて」と詠んでいます。虫は一般大衆、自分たちもその心を表現する俳諧という手段を持ったと嬉しげに鳴いているとの意です。

俳諧が近代以前の下層の人々の意識や文化を高めた効果は計り知れません。『武石村誌』の記述は、地域の歴史を記録し伝えるにはやや不正確と思います。

俳諧の大衆文化化の一つとして、江戸後期から明治初期には、俳句を記録した額＝俳額(句額)を、寺社に奉納することが行われました。

太宮諏訪神社に奉納されたものが、拝殿の東西の鴨居に遺されています。西の額は巻頭(右端)に旅装の芭蕉像を描いて、次のように65首が記されています。芭蕉像を描いた画号堀燕眼は武石の人のように思われますが、詳細は分かりません。

木部屋にも早稲積宵の曇りかな	余里	武一
稲かりや鶴の居る場をうしろ向	大屋	音好
小山ほと稲の浪よる日和かな	上丸子	楠翠
水音をわすれし夜半や雁の声	権現	氷雪
落着ぬ空のけしきをわたる雁	腰越	租秋
風音に実と覚ゆる稲穂かな	沖	静川

— 略 —

麻刈ったあとの淋しき残暑かな	越後	常枝
はつ雁といふうち跡の続きけり	東都	貞之
余処歩行せぬ事にして稲雀	同少女	多嘉
稲の露たゝ真直に上りけり	同	護楽
風筋の松にハ付きて残暑かな	上丸子	潤水

照込みて稲の際たつ香かな	沖	雪晤
兀山 はげやま のいよへ赤き残暑かな		一丸
雨風の苦もなく過ぎて稲の花	催主	霞川
十分に咲揃けり稲の花		蛙丸
□もつ草や残暑の夕けしき		春水

○

鳥居からうちにも	田桂園	
あるやこほれ稲		護岳
嘉永五年龍集壬子秋七月		



太宮諏訪神社に奉納された俳額

「嘉永五年龍集壬子秋七月」は、ペリーが来航する前年の1852年、秋7月は今の8月頃です。

五七五と七七を交互に繰り返す俳諧の連歌(連句)ではなく、前の句と後の句が、その感懐や季節感を繋いで詠む句会の発句と思われる。催主はこの句会を主催した人物、その前に置かれた二名は補助役、田桂園護岳は判者(選者)で江戸の俳句の師匠です。発句の経緯や発句者の関係など、詳細は分かりません。

発句者の居住地は武石14名(余里2、小沢根1、権現1、小寺尾1、沖5、片羽1、藪合3)、武石外31名(立岩4、古町4、腰越9、上丸子4、内村・和子・大屋・岩下・外倉・松本・越後各1、東都3)、不明6です。東都は江戸で、うち一人は少女です。

常枝・潤水・雪晤など5名は、天保15年(1844)の尾野山二柱神社の俳額にも名があり、選者は江戸の小菰庵こみのかみ碓嶺で、芭蕉の純粋詩に帰れと唱え、江戸期後半の俳風を築いた上田藩士加舎白雄かやしらおの孫弟子です。

武石の歌と踊りを繋ぐ

～武石音頭・武石小唄・武石讃歌・見よ美しの歌～

“武石音頭・武石小唄”などの伝承活動が住みよい武石をつくる会へ引き継がれることになりました。

第2章

“音頭と小唄のCDへの復活事業”と “武石讃歌と見よ美しの歌等のCD化”

1 日本コロムビアへ 「島倉千代子さん」を訪ねて

昭和43年にレコード化された二つの歌。音頭は“都はるみさん”が、小唄は“島倉千代子さん”が歌っています。保存会が発足後、先ず取り組んだのはこの“黄金のレコード”のCD化でした。その音源は日本コロムビアが特許権を持っており、復刻するためにはその音源を買い取ることが必要でした。

信州の小さな村の「宝物」になんとか新たな命を吹き込み、蘇らせたい！、私たちの強い熱望を実現するため、復刻事業への経費の支援を広く村民皆様に呼びかけました。するとこの趣旨に賛同された多くの方々の温かいお力添えをいただき、何とか実現への目途が立ちました。

そんな折、「今も歌手としてご活躍されているお二人に、何らかの形で村との更なるご縁が結べないだろうか？」との夢を抱き、ほのかな期待を胸にコロムビアを通じてお二人にこの想いを伝えました。この切望に応じてくださったのが島倉千代子さんで、「私でよろしければ何かのお役に立ちたい」と予期もしなかったお返事を頂いたのです。村の皆さんにメッセージを寄せて頂こうと考え、その

案をお伝えしました。

いよいよ日本コロムビアへの訪問と、ご本人との面会。島倉さんは私たちを本当に温かく、心を込めて迎えてくれました。

島倉千代子さんと筆者

平成16年1月。完成・復刻されたCDの冒頭に吹き込まれている「武石村の皆さん島倉千代子です…。」このメッセージが村民へのかけがえのない島倉さんからの心の籠った贈り物です。それも何と無報酬で応えてくれたのです。

苦勞に苦勞を重ね、幾度とない苦境を乗り越え、国民に哀愁溢れるあの澄んだ素敵な歌声を届け続け、そして誰よりもファンを愛し、大切にされた島倉さんの気さくなお人柄に触れた夢のような出来事でした。

2 上田市との合併にあたって “武石讃歌”と“見よ美しの歌”のCD化

平成18年3月6日。大きな期待と夢を胸に新生上田市が誕生しました。この日を迎えるにあたり、村から音頭と小唄のCD化事業を手掛けていた保存会へ、永く村民に愛され歌い継がれてきた“武石讃歌”と“見よ美しの歌”のCD化に力を貸してほしいとの依頼がありました。

武石讃歌は小学校の校歌とともに、見よ美しの歌は新制武石中学校の校歌として歌われて来た「言わば武石村民にとっては人生の応援歌」と言える歌です。

歌唱は片羽自治会出身のソプラノ歌手玉崎真弓さん、ピアノ伴奏は堀之内自治会のピアニスト柳澤美菜子さんです。閉村式の際には、完成したCDが流れる中、会場を溢れんばかりに埋め尽くした大勢の村民による“武石讃歌”の大合唱のもと、村旗が惜しまれつつ下ろされ、118年の歴史に幕を降ろしました。



保存会で制作したCD

(上)武石讃歌・見よ美しの歌

(下左)武石音頭・武石小唄 (下右)武石音頭セブン2007

3 武石音頭セブン2007の完成・発表

2007年(平成19年)12月。若い世代の方々にも武石音頭にもっと親しみや興味を持ってもらいたい。そんな想いから“ビートの効いた”“乗りの良い”新感覚の歌と踊りが完成しました。全国各地で盛り上がっていたよさこい踊りにあやかり、船を漕ぐポーズを随所に取り入れた正に武石風よさこいバージョンです。

歌唱は、旧真田町出身の歌手諏訪ひろみさんが抜群の歌唱力でカバー。新バージョンも若者を中心に永く伝えてほしいと願い、そのひとつの手段として、武石夏祭りなどで都会の方々との交流の機会に生かせないかと大いに期待を寄せているところです。

*今回の特集は、元保存会の方から寄稿いただいたもの、つくる会広報部にて編集を加えて掲載しています。